

科学技術政策担当大臣と有識者議員との会合 議事概要

- 日 時 平成 22 年 5 月 20 日（木）9：30～11：50
- 場 所 合同庁舎 4 号館 1214 会議室
- 出席者 津村政務官、相澤議員、本庶議員、奥村議員、白石議員、今榮議員、青木議員、中鉢議員、金澤議員、藤田統括官、梶田審議官、岩瀬審議官
- 議事概要

議題 1．平成 22 年度科学技術振興調整費への応募課題の審査結果について

（個別の研究課題に対する予算配分額に関わる議論であるため非公開）

議題 2．最先端研究開発戦略的強化事業について

< 二村参事官説明 >

- 奥村議員 拝見した中では必ずしも読み取れないので検討してほしいんですが。まず、国際シンポジウムというのはどちらかというと専門家が集まるわけですよね。そのときに必要なことは、選ばれた30課題の個別説明から入るのではなくて、その課題を解決しようとするもう1つ上位の課題があるわけですよね。具体的にいいますと、太陽電池のテーマがありましたと、これはやはり再生可能エネルギー、CO₂削減という手段としてやるわけですよ。そのときに、再生可能エネルギーとして本当に太陽電池がいいのかどうかと思っている人も少なくないわけですよ。したがって、異なる意見の人が参加するようにしてやってほしい。私も幾つかこういう学会のシンポジウムに参加したんですが、大体似たような人が集まって、頑張ろうみたいなことをやってるわけですね。あれではやはりクリティカルな発展はないということなので、上位の課題を取り入れているところを優先して取り上げてクリティカルなディスカッションになるようなプログラムを採択の優先順位にあげるということを入れたらどうかと。
一般についても同じで、30人の人が個別の内容をいくら説明してこういうことに役に立ちますということを説明されてはわかりにくいので、やはり比較技術を入れると。同じ課題を解決するのにこういう課題を解決するのにこういうアプローチもありますということも説明していただくと。その中で今取り上げている研究はより有効だということが最後になると思うんですけども、そういう啓発をやはり含めるような企画をして、それを優先的にするとか、そういう工夫をちょっとやっていただきたい。
- 相澤議員 大変重要なお指摘いただいたと思います。趣旨のところにも何かそういうような内容が反映できるようにちょっと考慮していただいて。そのほかにいかがでしょうか。これは本日決定ということになるのでしょうか。
- 二村参事官 できればそうしていただきたかったのですが、今のご指摘の点を修正したうえで、来週ご相談させていただければと思います。
- 相澤議員 それでは、ただいまの点以外にご指摘ございませんか。それでは、ただいまの点を検討

して。そうしますと、順序としては来週に決定するというようなプロセスで。

- 二村参事官 来週決定していただきたいと思います。
- 相澤議員 いずれにしてもこのプログラムを早く動かさないと、今年度の実施をしなければいけないものですから、早く決定したいと思います。

議題3．アクション・プラン（案）のパブリックコメントについて

< 須藤参事官説明 >

- 相澤議員 大幅な改訂が行われたということで、随分検討した結果、よりわかりやすい、あるいは読んでいただける形になってきたのではないかと思います。初めに、政務官からこの前コメントしていただいたことに対してこれで十分かどうかということを含めてお願いしたいと思います。
- 津村政務官 事務方からもご説明をいただきました。その際には各委員の先生方がかなり詳細に自ら筆を執っていただいて修正案をつくっていただいたということもそれぞれ拝見いたしまして、その文章がかなりの程度生かされているのかなという感想を持っております。相当わかりやすくなったのではないかなと思いますので、これでどれだけたくさんアクションが来るかわかりませんが、少しでも意見が増えればと期待しているところです。特につけ加えてのことはございません。
- 金澤議員 いま政務官がおっしゃったように大変良くなったと思いますが、1つだけ申し上げたいのは、1ページ目の2番目に「従来の予算編成プロセスでの問題点」というのがあるんですが、これはむしろ最初に来るべきじゃないのかなと思って聞いていたんですが。それを改善するためにアクション・プランというものをつくったという流れがいいのかなと思うんですが、どうでしょうか。皆さん方のご意見で、それでなくてもいいんだということならばそれでも結構ですが、後で問題点が出てくるので。
- 相澤議員 この辺の順序は、アクション・プランとはということをもまず言ってというのがこの考え方なんです。これで特に抵抗感がなければこの順序でもいいかなと。
- 金澤議員 このアクション・プランというものによって2番に書かれている問題点を払拭しているということがどこかにないとなりが悪いという意味です。
- 相澤議員 それが3番目の「ねらいと効果」。
- 金澤議員 そうですね。
- 白石議員 今の金澤先生のことは、このプレスリリースの方の2.のところに文章を1つだけ入れればいいんです。「なぜアクション・プランか？」と入れればいいんです。
- 金澤議員 それであれば。
- 相澤議員 そのほうが表現が明快ですね。
- 白石議員 2.の「従来の予算編成プロセスでの問題点」の前に、「なぜアクション・プランか？」と入れておけば、説明は済んでしまう。
- 金澤議員 おっしゃるとおりです。それで結構です。
- 中鉢議員 あるいは「アクション・プランとは」というようにして、その○のところに従来の予算編成の問題点と出して、 に「アクション・プランとは」というのが入って、 にこれが入ってくると。1と2を一緒にして、前文のような形で従来のものをやるのも1つかなと。それは好みの問題かもしれませんが。
- それから1つだけ、従来の予算編成のプロセスの問題点のこのポツが2つありますけれども、1つはやはり重複の排除だと思うんですね。もう1つは分散の排除です。分散の排

除のところがはっきりしてない。「予算が不十分」という言い方はちょっと誤解を招きかねないかなと。まずは、「各府省で重複はするなよ。」と。その結果「いろいろなところに分散するのもだめだよ。そうでないと規模感が出てこないよ。」ということが恐らく裏のメッセージだと思うんです。それを簡潔に表現するのが難しいので、重複の排除と分散の排除でバジェットの効率化を実現するんだということが背景にあるんだと思うんですが、「不十分」というのは「額を増やせ」という印象を受けないでしょうか。皆さんの意見をむしろお聞きしたいんですが。

○相澤議員 そこは工夫して。

○須藤参事官 弥縫的かもしれませんが、上の方は重複して概算要求されるというのが問題点、それが中鉢先生おっしゃいました重複の排除ということで、それと重点的に推進すべき施策が各府省に分散するという言い方でよろしゅうございますでしょうか。

○中鉢議員 そうですね。分散して規模が小さくなって実効効果が出にくいという論法だと思うんです。

○奥村議員 今のところと関係するんですけれども、その下の2.の○の最後の行ですが、「問題点も指摘されました」と、第三者的誰かが言っていると、これは良くない表現だと思うんです。その下は総合科学技術会議が責任を持ちますとか、強い調子で書いてあるわけですよ。全然平仄が合わない。だから、問題点は我々が認識したということ、主語を明確にしないとこれは合わないと思います。それが1点。

もう1つは、このアクション・プランの1番目のところで、アクション・プランとは、の説明の中に予算編成プロセスだという重要なキーワードが抜けている。上の四角囲いには書いてある。アクション・プランとはと書いてある定義の中にいきなり「行動計画」と今まで聞き慣れない何か直訳した言葉が出てくるので、そうではなくて、これは予算編成プロセスだと上と同じように書いたほうがいいんじゃないですか。あるいは予算編成の変革を通した行動計画とか、いきなり行動計画という今までデフィニションのないキーワードが出てくるので、ここもまた混乱しますよね。ですから、私の具体的な提案は、上の四角囲いと同じように科学・技術政策の予算編成プロセスの変革としたらどうでしょうかね。この行動計画というのはやめたほうがいいと思います。

○相澤議員 ただいまの点はそういう修正をお願いいたします。

○金澤議員 これはむしろ皆さん方にちょっとお伺いしたいんですが、司令塔という言葉が出てくるわけです。プレスリリースのほうの1ページ目の下のほうの中、それと本文のほうも1ページ目に出てまいります。ちょっと記憶が余り定かじゃないんですけれども、皆さん方のお話の中で司令塔という言葉がこれはかつて言われていてそれがそのまま踏襲されているんだけれども、本当にそれでいいんだろうかという議論があったと思うんですね。私も、自分たちで言うのはどうかなという感じがするので、ちょっと皆さん方のご意見をむしろ伺って、やめたほうがいいのか、入れていいのかというのをちょっとご議論いただければと思います。

○相澤議員 ただいまの点、いかがでしょうか。

○白石議員 次の調整費の議論にもかかわるんですけれども、極めて分散的というのが日本の政策決定のプロセスですけれども、その中で少しでも戦略性のようなものをつけたいというのが総合科学技術会議の趣旨であって、司令塔というのはそれを非常に大げさに言う表現なんです。ですから、その意味ではちょっと違和感があるというのは間違いなくて、それをトーンダウンするのであれば、総合科学技術会議が中心になってとかそのくらいにしておいたほうが実態としてはいいのかもしれない。司令塔ということを実際に言うのであれば、

それこそ戦略本部みたいなものをつくらなきゃいけないという気はいたします。

○奥村議員 この司令塔とは3期の基本計画に書かれている言葉なんですよ。ですから、十分な議論がないままに今の時点で削るということには極めて抵抗がある。実質はここにいらっしゃる方はご案内のように、司令塔機能ではないと認識されているんですが、少なくとも世間にはそう公言しているんですよ。そう思っている人が私の知っている範囲の中でも相当おります。今組織改正もご検討されているという話ですので、そういう反省の中にどう生かすかということだろうと思いますので、今の時点で中途半端にするのはいかがかと。

○相澤議員 以前にも司令塔機能が十分発揮されていないという議論があり、同時にどうしたらその司令塔機能を発揮できるようになるんだろうかという議論だったと思うんですね。これはある意味では自らここにスポットを当てて、姿勢としてはこうなんだということを訴えるということでもあるので、この段階では私は入れておいたほうがよろしいかと思いますので、こういう線だと思います。

○中鉢議員 世の中から「機能不全だ」というそしりを受けてのところがあるんだろうと思うんですが、もしこういうことであれば、さっきの奥村先生のお話にもあったように、上は「問題点が指摘された」と受身形なのにここでいきなり「司令塔」というのは少し奇妙さがあります。だから、「こういうものは問題だ」と断定的に言ってもいいのではないかと思います。この平仄を考慮すると、ここで何も謙虚に話す必要はないと思います。もう一回構成を考えると、内容的に言いたいこと、コンテンツとしては私は賛成ですけれども、構成上この辺を考えたほうがいいんじゃないかなと。司令塔なのに「指摘されました」だと、何か奥ゆかしい感じすらします。

○津村政務官 今までの議論すべて違和感ないと思っています。1つ、志を共有したいという意味で申しますと、確かに総合科学技術会議を科学技術戦略本部に改組する議論はもうこれは公然と始めているわけですから、早晩何らかのたたき台を、官邸から来るのか、我々から出すのか、ちょっとプロセスはまだ不明ですが、出てくるということですので、それを待たずして、現在の枠組みの中でも運用でこういう従来の問題点を克服していこうというのが私たちの今の立ち位置だと思っているので、そういう意味では法律がまだ改正されていないから我々はまだその一手手前の段階ですという自己認識ではなくて、法律を先取りするぞということをやれることをやろうというのがアクション・プランだと思っていますので、今の意欲的なご議論で大変すばらしいと思って聞いておりました。

○相澤議員 それから、このプレスリリースの3ページの最後に、なおというところを書いてあるんですね。これをパブリックコメントを求められた人たちがきちっと見てくれるかどうかというところなんですね。あくまでもこの段階のものは課題解決に向けた方策の展開方向、これを示したまでであって、これからいよいよ最終のアクション・プランというものを仕上げていくんだというところなんですね。だから、ここに書いてあるからいいわけですが、この辺が見落とされないようにと思います。

それでは、プレスリリースについては以上とさせていただきます。

パブリックコメント募集の案という本文でございます。これにつきましてお気づきの点がございましたらお願いします。

○本席議員 金澤先生のご意見をお聞きしたいんですが、25ページ、技術的なことですが、介護の支援技術、特に機器的なことを開発するといっているのが、ここのローマ数字の小文字のほうの 1 番目、推進目標の2番目のポツに、要介護者の増加率を抑制するというのが書いてあって、これに対応する方針として、1番目のポツだと思うんですが、認知機能・身体機能を維持する機器の開発・導入ということが書いてあるんですね。本当にそれが可能な

のかどうか。つまり、機器を開発して要介護になる人をその手前で何とか押し戻すということが本当に可能なのかどうか、それがちょっと心配なので、どうすべきかなと。

- 金澤議員 ご指摘のとおりだと思います。これそのまま非常に素直にとれば大変難しいことを目標に掲げてしまったのかなと。すべてを達成するということを目標といたしますと、この文言、つまり要介護者の増加率の抑制というのは大変難しい。しかしながら、1つの考え方としては、そこへいくまでの人の対応をどう考えるかということがやはり大事なので、そこを考慮に入れながらということであればこれぐらいは許されるのかなと。つまり、家族が高齢者と一緒に住んでケアをしていくということが社会の中で根付いていけば、こういうことが、少なくともどんどん増加することはなくなっていくだろうと思うんですね。ですから、これはものの考え方だと思います。これはこれでいいということにすれば、それは裏にはそういう非常にウェットな部分も入っているというふうに理解することはできると思うんですが。これと機械の開発とを直結させると大変難しいと思いますね。

ついでに1つ申しますと、推進方策の1番目の認知機能を保たせる機器の開発は不可能じゃないかもしれませんが、身体的機能を維持させるというのは、これは例えば高齢者が一人で住んでいるということを想定したときに、トレッドミルのようなものを1つ置いてこれはどうしようもない。むしろ高齢者の心理的特性を考慮に入れたという形容詞でもつけると多少はいいかもしれない。何かそういう、ちょっとウェットかもしれませんが、やはり単に機器の開発だけが目的じゃないんだということをどこかで示していただければと思います。

- 中鉢議員 ちょっと細かいところで申しわけありませんが、8ページ中ほどからちょっと下の「再生可能エネルギーは公的補助を受けて」云々というフレーズがございますね。その1行下に民間主導と対比的な表現になっていますが、これはいささか現状からいうとミスリードするんじゃないかなと。現在の再生可能エネルギーが公的補助だけではないというところで、ちょっと書き方の工夫がいるという感じがします。

- 相澤議員 ここは、それでは具体的に修正させていただきます。

- 金澤議員 先ほどのこととちょっと関係するかもしれませんが、25ページに高齢者・障がい者のことがひとまとめになっているんですが、自立支援ということがやはり中心なものですから、何か突き放すような感じがするんですよね、これだと。つまり、障がい者あるいは高齢者を何とかとにかく一人でやらせる方向が主に前面に出ているみたいな気がしてしょうがないんです。つまりもっと大事なのは、コミュニケーションをいかにとるかということなんですね。そのコミュニケーションという言葉はどこかにやはり入れてほしいと思うんです。例えばでいいますと、上から(1)の4行目、高齢者・障がい者の科学・技術によるコミュニケーション及び自立支援とか、コミュニケーション支援及び自立支援とか、そういう何かがないと、人と人とのつながりが非常に少なくなってしまうようなニュアンスがありますので。

- 相澤議員 ただいまの点は、科学・技術によるコミュニケーション支援ということだけでよろしいですか。

- 金澤議員 自立支援も必要なんですけれどもね。

- 相澤議員 もちろんそうなんですけれども。コミュニケーション支援ということで。

- 金澤議員 これは課題そのものですね。

- 相澤議員 そうです。

- 金澤議員 それを変えたらまずいか。

- 中鉢議員 今の件ですけれども、どこかのときにお話しましたように、やはりテクノロジーオリ

エンテッドなんですね。だから、金澤先生がおっしゃるような例えば健常者との共生とか、こういう視点というのはあまり出てこないですね。それは制度のほうでという扱いで。だから、科学・技術の役割を特出ししているような書き方なんですね。技術、テクノロジーを使ってどういう社会をつくるかというのはここにはあまりありません。それをどう扱うかというのは迷うところではあります。

- 奥村議員 私の理解は、要するに２段階ある。おっしゃるようにイノベーションを起こすには科学・技術だけではだめですねと、これは当然なんですね。一方の問題認識は、科学・技術の断面だけに限ったときでも冒頭にありますように各府省がバラバラにやってる。今回のこのアクション・プランのパブコメの中に何をどこまで入れるのかということの問いかけなんですよ。今回つくられているのは、まずはその技術分野における各府省の連携とかそういうことをより中心に国民に提案しようと。それはすべてではない、始まりなんです、イノベーション創出の。そのことは恐らく今の構図の中ではわかりにくいということのご指摘だと思うんです。

この後どういう作業が続くかといいますと、個別施策の科学・技術予算の選定に入るわけですよ。そこへつながる、その入り口の段階なんですね。

- 金澤議員 多分誤解されたんだと思うが、申し上げたコミュニケーションというのは要するに機械を使ったコミュニケーションなんです。つまり、頭で考えたことをデコーディングですね、つまり何を期待するか、何を希望しているかということを知りて行動に移すというそういう意味のコミュニケーションを思い描いていたので、例えば脳波の一部を使ってとかそういうことですので、コミュニケーションという言葉を使ってあるかどうかということだけをこだわったんです。それだけです。
- 相澤議員 ただいまのご議論は、具体的にこの課題のレベルの変更も現段階では可能と考えていただいたほうがよろしいのではないかと思います。したがって、そう入れた方が全体的に落ち着くならばそれはそれで結構だと思います。ただ、それが入ることによって後にくるところがそこに何の指摘もないような文章になっておりますので、かえってそれが整合性がとれるかどうかというところがございます。
- 金澤議員 では、課題はこのままにさせていただいて、例えば の最初のポチの障がい者の機能支援というその機能の中にコミュニケーションを含むということをおっしゃっていただければ、それで結構だと思います。
- 相澤議員 本席先生、いかがでしょうか。そういうことで。
- 本席議員 結構だと思います。
- 中鉢議員 グリーンイノベーションについて、19ページの参考資料なんですが、あくまで参考ということを知っておりますが、これは以前から何度も申し上げているように、私にはわかりにくい図です。「ポートフォリオ」という表現が抜けましたが、やはり根本的にわかりにくい図だと思うんですよ。むしろあえて言うと、横軸に例えば投資があった方がまだわかります。横軸に投資があって、その効果がいくらかと。この図には、ふき出しがたくさんありますが、実はふき出しのほうが大事に見えます。可視的に見えているこの図形からは、本文に記載されている設定方策を導き出しにくいように思います。言い換えますと、太陽光発電とそれから原子力が有効だという結論を言いたいためにふき出しがあるように見えます。

また、黄色で囲っているところは恐らくリファレンスですね。リファレンスを生かそうという意図はよくわかるんですけども、いろいろなことを書いてここから引き出している結果は、合理性が少し欠けていると思います。

それから、(2) の下の方の図も、わかりにくいと感じました。字が小さくて私の目で見えないんですが、図の色の違いはわかります。実は細かい字のほうが大事なんですが、ちょっとミスリードするんじゃないかと思うんですが。皆さんどういふうに見えるのかわからないですが。

- 相澤議員 第1点のご指摘は、その見にくいところの改良はできるかと思います。横軸、縦軸の関係ですけれどもね。先ほどの点は横と縦を逆転させたほうがいいと。
- 中鉢議員 いやいや、そこまではやらなくていいですよ。費用対効果の図にしたほうが、私としてはわかりやすいかなと。つまり、原子力がこれしかCO₂を削減できないという図にするのではないということです。そうしないと、全部原子力にしたらいいじゃないかとなってしまいますので。それから、水力も同じですね。そうできない理由があるので全部そうっていないわけですから。こういうことからすると、何をもってこれを決めたのかという点、1基当たりのコストの問題なのか、あるいは全世界のアベイラビリティなのか、これがわかりにくいのではないかと感じています。
- 相澤議員 そのところは確かにふき出しに書いてあるので。先ほどおっしゃったところを最大限生かすような形で工夫させていただきます。
- 本庶議員 推進方針の25ページのところに戻るんですが、高齢者の認知機能・身体機能を維持させるというのが、これが現実性があるかどうか。これはむしろ補助する機器の開発・導入ならこれは非常にわかりやすいと思うんですが。奥村先生、どうですか。
- 奥村議員 大事なのは要するにそういうかなりチャレンジングなことに目標を掲げてくる個別施策を誘導することにあるわけですね。ですから、あまり現実妥協すると、本当にチャレンジングな政府としてやるべき施策が出てこないとだめになるわけで、そこは表現上どう適正化するかということだと思います。
- 本庶議員 だから、維持・代償ということにすればかなりリアリスティックだと。人が持っているものを維持とをもってくるとなかなか測定方法にもよりますけれども、厳しいところがあるんじゃないかとちょっと先ほどから心配していたので。そういう方向でいかがかと思いますが。
- 奥村議員 19ページの参考資料がちょっと見にくいというのは私も同感なんですけれども、再生エネルギーで一番重要なことは、ここでは太陽電池等を挙げているんですが、基本的に、今の段階では商用のほかの電源にコストで勝てないという問題があるわけです。むしろ手段というか方法は太陽電池であれバイオマスであれ水力発電であれ、極端なことを言ったら何でもいいですよ。それは個別施策で提案していただければ。大事なことは抜本的なコスト削減をできる知恵が入っているかと、そこを見るということが私は再生エネルギーのある意味では政策的な技術課題だと思っているわけですね。そういう施策がもしどこかの府省にあって、太陽電池だけが対象のように見えますけれども、間口はもっと広げてあるということが読み取れるようにしてほしいですね。バイオマスは課題だけが挙がっているような記載ですので、何か中途半端ですね。
- 相澤議員 はい。それでは、時間的には大変厳しいわけですが、今日の4時までにとということでお願いしたいと思います。

議題4．平成23年度科学技術振興調整費について

< 須藤参事官説明 >

○白石議員 今の説明は、案1と2でどういうプラスマイナスがあるかという説明ですけれども、私自身の考えは、そもそもSABCだとか調整費だとかアクション・プランというのはどういう性格のものとして考えればいいのかということそのものについての議論でございまして、一応頭の整理のために、横軸に戦略性をとって縦軸にリスクをとりますと、当然戦略性が高いとリスクも高くなる。日本の政策決定のシステムあるいは予算編成のシステムというのは基本的に極めて分散型のシステムで、あるアメリカの政治学者は日本には1,400政府があると、つまり課長の数だけ政府があるんだというそういうことを言っている政治学者もいますけれども。そのくらい分散型で、そうすると、当然のことながら、リスクは低いけれども同時に重複があり、穴があり、戦略性はないということになります。そういう分散型のシステムを前提にして、少しでも戦略性をつける、あるいは体系性をつけるという発想が多分CSTPがつけられた理由で、だから司令塔だとか戦略性だとかということが常に言われると。だけれども、そこで実際にじゃあCSTPがやっているのは何かというと、ここで矢印ちょっとだけ非常に短い矢印を書いています、せいぜいこのぐらい。科学・技術関係の予算全部を例えば戦略本部が持って、それをいろいろな省に分配すると、そのときには非常に高い高度の戦略性と高度のリスクを担うようになる、そのときには集権型のシステムのほうにはるかに寄っていきましますけれども、そんなものは最初から目指してなくて、分散型からちょっと矢印で上に上げましょうというのが私は多分CSTPの基本的な制度のデザインだというふうに考えております。

その中でSABCというのが一番最初につくられたポリシーのツールであり、戦略性を付与すると思います。調整費というのが2番目につくられたツールであり、アクション・プランというのが今度つくられたツールであると。これでやっこの矢印のところぐらいまでくるのかなというのが実は私の分析でございします。

ですから、もしアクション・プランがあるから調整費がいらないということになると、それは基本的にこんなに伸ばさなくていいんだと、もっと分散型で今のままでいいんだというのが私は基本的な考え方になるし、いや、やはりそれはまずいのでちょっとでも現状の分散型を踏まえて戦略性をつけるということであれば、アクション・プランができたから調整費はなくすんじゃなくて、アクション・プランの次にはまた何かそれこそ別のツールも考えましょうというそういう方向にいくことになるんじゃないのかなということでございます。

- 中鉢議員 戦略性の高い低いでこういうふうに左から右にいくというのはわかるんですけれども、戦略性が高くなるとリスクが高くなるというのをもう少しご説明いただけますでしょうか。
- 白石議員 戦略性が高いというのはやはり集中をするということですよ。かなりめりはりをつけて、テーマを決めて、そこにお金をつぎ込むことになりますから。そうすると、間違えたときには当然ダメージも大きくなるのでリスクは当然高くなるんじゃないかと思います。
- 中鉢議員 我々ももちろんリスクミニマイズに走りますよね。リスクをミニマイズするために戦略的に行動したりしますので、リスクミニマイズは戦略性に乏しいというリニアな相関関係まではないと思いますが。
- 白石議員 いや、だからその戦略性を担保しながらその中でどうやってリスクを低くしていくのかというのは、ここでは45度で引いてますけれども、果たしてこうなっているかどうかというのは知りません。これはあくまで頭の整理のために使っているの、ひょっとしたらもっとこういうカーブになってまして、戦略性が相当高いところまではリスクはそんなに高くない、あるところまでいくと急速にリスクが高くなるという可能性だってあるので、多

分現実にはこういう図じゃないかなと私は思いますが。その辺は頭の整理のためなのでまあ直線でいいと。

- 奥村議員 ここは機能で整理されているんですけども、もう1つ予算の執行面で見ることが大事ですね。例えば先ほど担当府省から個別案件の報告があったわけですが、我々は個別のプロジェクトについてはある意味では担当府省にお任せしているわけですね。個別の案件の進捗成否はここでは現実には難しい。ですから、私は調整費をより有効活用するのであれば、我々内部の実行体制を整備することが不可欠だと思います。それなしに予算だけ増えると、よりアバウトな使い方になる恐れがある。執行の能力を並行して考えないと私は少し議論としては片手落ちかなと。
- 金澤議員 大変ナイーブな意見でプリミティブな意見になってしまうかもしれないんですけど、ちょっと本当の意見だと思って聞いていただきたいんですが、今まで振興調整費でやってきたもの、それからこれから恐らくやろうとしているアクション・プランを支えるようなものとしてというのは、いずれにしても本予算といいますか、実際に動く日本全体の大きな予算の中でも語られることがほとんどではないかという気がするんですね。これはむしろ昔の調整費にかかわっていた者の一人としてちょっと思うんですが、そういう本予算できちんとやれないようなものをここで取り上げるということを1つ入れてはどうなんだろうかというのが、非常にナイーブな意見なんです。つまり日本全体の大きな流れの中で議論するには比較的小さな問題かもしれませんが、長い目で見て科学・技術の立国を目指す日本の中ではかなり大事なものというのはいくらもあるわけですね。そういうのをむしろ光を当てるというのはいかがなものかと思いますが、どうでしょう。
- 相澤議員 今のご指摘は、振興調整費をむしろそういうところに充実させるべきだというほうのご意見ですね。そのほかいかがでしょうか。
- 奥村議員 言ってみますと政策的なボトムアップのご提案だと思うんです、ボトムアップ型政策課題といいますか。この白石先生の絵というのはこれが現実だということはよく理解できるんですが、本来の機能であれば、この白石先生の矢印のもっと右上のほうでC S T P が決められるはずなんですよね。機能として。総理のお力を借りて。現実はそのができない。
- 白石議員 お金がない。
- 奥村議員 いや、お金といいますか、権限と同時に、やはり我々がそこまでのハイリスクを背負う課題を大金をかけてやるだけのエビデンスを提示できていないことも問題と思います。したがって、我々は各府省の調査に依拠し、それ以上のことはなかなかできていない。これを執行するのであれば、あるいは拡充するのであれば、調査機能を含めた執行機能の充実を図ることが重要。各府省がやりたくないからこちらがやりますというのは、ある意味重複ですよ。各府省がやりたくない理由に対して、なぜC S T P はそれを主張するのかということを経政策的、科学・技術的にに決着つけないと。
- 中鉢議員 科学・技術行政の社会保障みたいなものだというふうに思うんですが。もし社会保障になぞらえて考えるなら、まずは自助というものがあって、共助があって、公助があるだろうと。だから、各府省が全体最適をもって自助すべきで、自分たちで政策をつくるべきであるということからいうと、アクション・プランという指令のもとにそれをやるべきであると。それから、共助という部分については、S A B C というものがあるでしょうと。それから、公助というのは恐らくそれでなかったらこっちがやりましょうという調整費みたいなものだとは私は思うんですね。そのアクション・プランがあってS A B C があって調整費の位置づけだと思うんです。調整費が最初からあるというのはいかがなものかなと。それは、本来的に各府省が全体最適に向けて各々の役割分担を果たすべきであると。しかし、

現実には残念ながらというところをどういうふうにセーフティネットをかけるかという保障的な色彩が強いのではないかと。じゃあ限られた予算の中でどういう比率でやるかという議論が、あるいはコンセプトの整理がまず必要なのかなと。ただ、今タイミング的にアクション・プランという現行での運用でどうにかなるんじゃないかという議論をする一方で、この権限の範囲についてどうするかという大きな方針がこの後待っていることを考えると、今その調整費云々というのを意味づけたところでどうなのかなと。実際にはそのことがないと、調整費が増えたらほめられることなのか、減らしたらほめられることなのかということからすると、タックスペイヤー的に言うと随分違う感じがしますし、この説明というのは非常に国民にわかりにくいものだと思うんですよ。だから、そのアクション・プランの意味づけだとかSABCだとか調整費だとか、自助と共助と公助のところをまとめないと、すべての指令というものが完結しないのではないかと私は思うんですけども。もし中途半端であれば、いつまでに決めるかというその附帯の条件を早く決めないとこの議論というのは最後にひっくり返るといって、何か意味のないものになっちゃうんじゃないかなという感じがするんですが。

基本的にはというか、もっともコンフリクトが起こるところ、予算づけをする部分と、それから政策決定というものがなかなか一致しないということが調整費の考え方の根源になっていると思うんですね。そうすると今の内閣の中でその両方の役割を総合科学技術会議が担うことになったときにどういうふうにするんだろうかというのはなかなか難しい話ですよ。それは総理が両方そういうものを決めるものではないのかなというふうに思いますけれども。その方針を明確にすることはいずれにしてもどこかで必須なことだろうというふうに思います。

- 本庶議員 議論としては、今年の調整費をどうするかという問題と、来年以降、組織替えした中でのある程度理想型の中での仕組みをどうするかという問題は分けて考えないと。現実問題としてはやはり今年の振興調整費をどうするかと、これまずけりをつけて、そして実際に予算枠組みをどうするのかははっきりすべきだと思うんですね。

基本的には私は白石先生のご提案が方向性としては正しくて、来年以降、短い矢印がもうちょっと右のほうにいくように全体設計がされるべきであると。その中で振興調整費もそれにふさわしい位置づけとパイの大きさと仕組みと、奥村先生おっしゃったようなそういう形でセットされるべきだと思います。ただ、それを今我々がここで議論しても、これはちょっと無理な話ですから、当面ことしどうすべきかと、これにやはり絞らないといけない。

現実を見ると、まずアクション・プランは極めて一部しかやっていません。それから、各省庁から出てくる予算案のほとんどは昨年度と大差はないという状況の中で、振興調整費の役割というのは私は現時点で十分にあるし、これをきっちりと有効に使うことを考えるのがベストではないかと。その説明責任としては十分にこれまで振興調整費のレビューというのはそれなりに文部科学省でもやっていますけれども、かなり大きな先行的な仕組み、いっぱい事例はあると思うんですね。それで、決して総合科学技術会議が使った振興調整費がほかのSABCをつけたものと比べてまずいというふうな評価では私はないと思うので、そこは事務にきっちと整理してもらおうということは可能だと思います。私はとにかく進めるというのが現実的だと思います。

- 相澤議員 本日はいろいろなお意見が出まして、前回に比べて基本的なところに立ち戻りつつ、現実を見据えてというところにいるいろいろな意見をいただきました。もう一度これを整理いたしまして、来週また議論を続けさせていただきたいと思います。

議題５．第８回産学官連携功労者表彰について

< 衆原参事官説明 >

（特に意見なし）

（以 上）